

コロナ禍後を見据えた文字・活字文化推進活動を！

—コロナ禍の最大の負の遺産、「出生数の大幅減」に備えよう—

開倫塾

塾長 林明夫

1. (1)日本産科・婦人科学会の2020年12月12日の中間発表によれば、2020年10月から2021年3月までの分娩予約者数は、昨年同期比で都市部で24%減、地方部で37%減とのことです。
 - (2)また、私の住む栃木県足利市のHPによれば、2021年2月の出生数は44名と、2020年2月の出生数60名と比べ、16名減となっています。
 - (3)コロナ禍前の超少子高齢化による人口減に加え、コロナ禍による2割～3割人口減が今後数年間続くと思われます。
 - * コロナ禍の最大の負の遺産は、出生数の急速な減少、人口動態の変更と思われます。

2. (1)これに加え、コロナ禍は

- ①消費意欲の大幅な減少(サービス産業での売上減)
- ②オンラインの活用によるテレワークの普及
- ③新しい生活様式
- ④海外との交流・取引方式の変更

* これらは、すべての業種・業態の「ゼロベース」での見直しを迫っています。

- (2)①教育分野でも、「幼児教育」「初等教育」「中等教育」「高等教育」「生涯教育」「企業内教育」などありとあらゆる教育分野で、「学校休校」や、「学校行事や教科外教育の大幅自粛」により、教育のありように「ゼロベース」での見直しが迫られています。
 - ②特に、大学などの高等教育機関では、2020年4月からオンライン教育が中心となりました。従来の教育・研究のあり方の抜本の変更が迫られました。この1年間、すべての大学教職員とすべての学生・院生は、この試練によく耐えたと高く評価いたします。
 - ③社会教育分野でも、公共図書館はじめあらゆる社会教育施設はこの1年間ほとんど機能不全に陥り、企業内教育やNPO・NGO、職業訓練、コミュニティーカレッジ(大学開放)でも超停滞の状況にあります。
- (3)①「医療や介護・福祉」のあり方を含め、公共部門や自治体、国のあり方の抜本の見直しが迫られています。
 - ②コロナ禍の世界的蔓延に加え、大地震や大津波、大雨による大洪水、また、火山の爆発など「低頻度巨大災害」発生の可能性も高まっています。
 - ③このような状況の中、文字・活字文化推進活動の重要性は極めて大きいと考えます。とりあえずは、コロナ禍後の最大の負の遺産である「出生数の大幅減」と「人口減少措置」について「ゼロベース」で策を練るべきと考えます。

3. 「小学校区単位で遊休施設を活用してテレワークセンターの整備を」ーピンチをチャンスにー
- (1)①「テレワーク」の推進は、「密」を避けるために自宅など従来の職場から離れた場所でオンラインを活用した業務推進を加速させます。
- ②しかし、現実には厳しく、Wi-Fi 環境や周辺機器の不備、自宅の広さ、他の家族とのコンフリクトなどで、従来の職場と同程度の生産性を維持することに困難を極めている人が多いようです。
- ③また、自宅でのみ長時間仕事をするのは、メンタルヘルスの健全さを保つ上で難しい場合が多いようです。
- (2)そこで、小学校区単位で遊休施設を国や自治体、NPO、企業などが連携して借り上げ、「地元密着のテレワークセンター」を設置することを提言いたします。
- ①「Wi-Fi 環境の整備」
- ②「PC に詳しい技術アシスタント」
- ③「日曜・祭日などの休館日なしの、できれば朝 5 時から夜 12 時までの長時間開館」
- * 以上は絶対条件です。
- (3)①全国各地には、使用しなくなった学校跡、ショッピングセンター跡、大型商店跡はじめ歯抜け現象の激しい商店街、空き家などが山ほどあります。
- ②これらを活用し、お金をほとんどかけずに地方創成の本拠地として小学校区単位で「テレワークセンター」を設立することは、コロナ禍・コロナ禍後の働き方改革に大きく役立ちます。
- ③お手本は「フィンランド公共図書館」です。「フィンランド公共図書館のエキス」を地元密着、小学校区単位の「テレワークセンター」として応用すべきと考えます。
- *〈参考〉吉田右子他著「フィンランド公共図書館、躍進の秘密」新評論 2019 年 11 月 2 日刊

4. (1)ピンチをチャンスに
- (2)地元密着の「テレワークセンター」でこそ、文字・活字文化推進機構の活動のすべてを展開。
- (3)コロナ禍後の超少子化に備えるべきと考えます。

5. 終わりに
- (1)毎年 11 月第 3 木曜日は、国連が定めた「ユネスコ世界哲学の日」です。
- (2)2021 年の 11 月第 3 木曜日は 11 月 18 日です。
- (3)文字・活字文化の根底を支える「哲学」を当機構でも真正面からとらえ、「世界哲学の日」をご活用いただきたく提言申し上げます。

以上は、2021 年 3 月 29 日(月)に開催された公益財団法人文字・活字文化推進機構評議員会での筆者の発言資料です。

Q：最後に一言どうぞ。

A：今月も先生方がお読みになれば必ずご参考になる本を何冊かご紹介いたします。

- (1)1 冊目は、日本カリキュラム学会元会長で教育評価の第一人者、安彦(あびこ)忠彦先生の最新著「自己評価のすすめー『自立』に向けた『自信』を育てるー」図書文化社 2021 年 3 月 16

日刊です。「教育面における自立」は、「自己教育力を持つこと」を意味します。「自己評価」によって得られる「知恵」を通して「自信」を増し、それによって「自己教育力」を健全で効果的な「自立」に向けて育ててほしい(P181)との願いのもとに執筆なさいました。名著「自己評価―『自己教育論』を超えて―」図書文化社 1987年10月10日刊の応用編、現代版です。是非、2冊ともじっくりお読みください。必ずお役に立ちます。

*安彦先生のご著書といっしょに、哲学者 森有正先生やアラン先生の著作をお読みになると、「経験」を基礎とした「自己評価」の大切さがわかります。

(2)2冊目は、最も人気の高い哲学者 松永澄夫先生の最新作「戯曲 母をなくして」東信堂 2021年4月5日刊です。前著「或る青春」東信堂 2020年12月25日刊の続きと思われます。その前の作品「幸運の蹄鉄」東信堂 2019年10月20日刊と併せてお読みになると、三部作であることがわかります。「二つの季節」東信堂 2018年3月20日刊も手放せません。名著「食を料理する 哲学的考察」東信堂 2003年12月15日刊はようやく「増補版」が2020年6月15日に刊行され、大好評です。松永先生の「価値・意味・秩序 もう一つの哲学概論：哲学が考えるべきこと」東信堂 2014年4月25日刊は、これらを読んでから再読するとよりよくわかります。さらに、同著「哲学史を読むⅠ・Ⅱ」東信堂 2008年5月20日刊なども併読することで、哲学の理論と哲学するという日常生活が結びついてきます。是非、松永先生のご著書で少しずつでも哲学に親しんでください。

(3)3冊目は、文豪 幸田露伴による「渋沢栄一伝」岩波文庫、岩波書店 2020年11月13日刊です。渋沢栄一自伝「雨夜譚(あまよがり)」岩波文庫、岩波書店 1984年11月16日刊と併せてお読みになると、「近代日本資本主義の父」のお一人と呼ばれた渋沢翁の「高い志」がよくわかります。NHKの大河ドラマの理解も深まります。

(4)4冊目は、藤井聡・高野裕久著「感染列島強靱化論 パンデミック下での大災害に備える公衆衛生戦略」晶文社 2020年12月5日刊です。コロナ禍に加え「低頻度巨大災害」が発生したときどうするかは、すべての学習塾・予備校・私立学校の課題です。藤井聡著「『自粛』と『緊縮』で日本は自滅する 菅総理への直言」ビジネス社 2020年11月1日刊は、コロナ禍の新しい「生活様式」で日本社会が壊れ始めているとの厳しい認識の下、国民被害を最小化する「コロナ対策」を提言しています。

(5)5冊目は、中国問題の専門家 遠藤誉著「裏切りと陰謀の中国共産党建党100年秘史 習近平、父を破滅させた鄧小平への復讐」ビジネス社 2021年4月1日刊です。同著「『中国製造2025』の衝撃」PHP研究所 2019年1月11日刊、同著「ポストコロナの米中覇権とデジタル人民元」実業之日本社 2020年8月5日刊ではよくわからなかった中国の内部事情が、本書で少しずつわかってきます。

*難しい時代に入りましたので、以前ご紹介したファン・リンス著「民主体制の崩壊 危機・崩壊・再均衡」岩波文庫、岩波書店 2020年11月13日刊とともに、新冷戦とも呼ばれる現代世界の外交を考えて参りましょう。

(6)6冊目は、作新学院大学学長渡邊弘著「宮城まり子とねむの木学園 愛が愛を生んだ軌跡」潮出版社 2021年2月21日刊です。「ダメな子なんか一人もない」、子どもに関わるすべての大人たちに伝えたい「奇跡教育」を是非、お読みください。

2021年3月29日